## 5 組踊忠臣蔵（東江上）

地　謡・歌、三線・太　鼓

与那城　彦興　知念宗真
与那城　安夫　知念一郎

### 第一幕のあらすじ

登場人物
潮　平

**あらすじ**
今出たおれは、伊豆御殿の下代潮平である。今日お城から勅使でご来行の接待のため、わした、う前に塩冶ぬ御前は、そのとおり、朝早々からの御登城やらで、高良ぬ按司よりお布令言い渡され、あゝ大変大変。二、三日前から大ごと続き、やとい人二、三〇人で三度のまかない事で煙は七重八重天に立ちのぼり、内鳴り渡り直に夏雷、あゝさてさて、豊年のお米や穀物もたくさん積んでの事ながら、何とうらやましいことよ。そう、こう言ってもわした男の生き仕事、さあ気張ろう、気張ろうと、ずる賢く言いふらしている様。

### 第二幕　宜那真大屋久松伐りの場面

登場人物
伊豆ぬ若按司・宜那真大屋久

**あらすじ**
宜那真大屋久が松の木を伐って公を残さんと、そのしぐさを見せ、主人公である伊豆の若按司を励ます場面。

**伊野波節**
（今生の別れ、思い入りの場面）
歌　何時までゆとむて　泣ちゆが
　　此ぬ二人
　　あわり別りん　すらなゆみ



### 第三幕　宜那真大屋久わいろの場面

**高良按司へ贈った貢物**
イ．目　録　一つ
　　巻　物　三〇本
　　黄　金　三〇枚
　　〃　　一〇枚（家老）

※本来なら当然伊豆ぬ若按司が高良ぬ按司へ刃傷を働き、伊豆家が断絶に及ぶべき運命にあったが、伊豆家には宜那真大屋久のような知恵者が居たため危うく難をさけることができたと伝えられている。

### 第四幕　加那ぐずぃ城に行く場面

登場人物
加那ぐずぃ（平田の子の奥方）

**あらすじ**
加那ぐずぃ大内原の使いとして供人と二人、お城の安否を憂い、夜行の旅路。

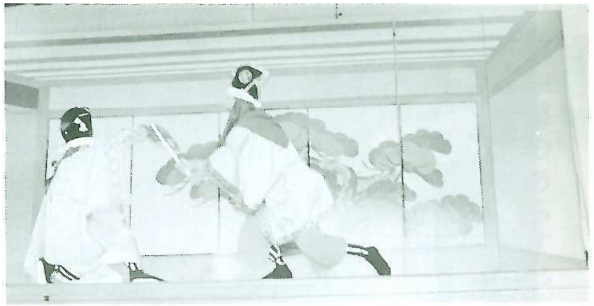
**散山節**
歌　なま出じる我身や
　　塩冶ぬ身内
　　大内ばらからぬ
　　使けどやゆる

**子持節**
歌　夜ん暮りて居りば
　　供連りと二人
　　御城に向かて
　　忍でいちゅん。

## 第五幕　松の間の刃傷

登場人物

**塩冶ぬ按司　高良ぬ按司**



**あらすじ**

塩冶の按司は登城時刻が遅れたことで高良の按司にののしられ、大口論となり、遂に殿中松の御廊下で、高良按司を斬りつける場面。

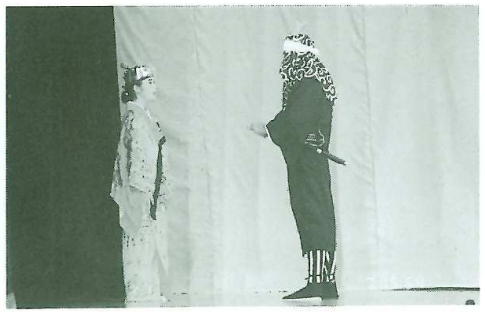
※塩冶の按司が高良の按司へ贈った貢物

せんす　一対
菓子折り　一箱

## 第六幕　平田里之子、加那ぐずぃと対面の場

登場人物

**平田里之子、加那ぐずぃ**



**門　番（幕内……城中で）**

平田里之子は、塩冶ぬ按司の臣下でお供役だか、一人色欲に耽けたため、供を外れ、お旦那の様子を案じお城を尋ね、その安否を聞く。城内の門番から聞けば、塩冶の按司は高良の按司を傷つけた咎に屋敷中お取り上げと知るや平田里之子は自責の念で切腹せんとするところに加那ぐずぃが城内から出てこれを止め、色々心境を語り二人は親里に帰る場面。



## 第七幕　吉屋うみすぃなぬ宿（その一）

登場人物

**神崎之子、矢間大屋久、喜如嘉大屋久、大石大主、寺岡ぬ比屋、金松、源河大屋久、伴田大屋久、宿の女**

**◎三人武士の出場**

**須磨の浦節**

歌　忍ぶ心は　いざ仲島に
大石大主　尋にて行きば
色に耽きたる　馬鹿大石
顔に編笠　腰巻く羽織
吹ちゆ散らすな　裾野風

**※七段目大石大主遊興三昧の場**

◎大石大主は酒乱含み遊興三昧にひたれているところをその臣下、寺岡、神崎、矢間、喜如嘉が見入り仇討ちの意志を大主聞くが、酒に酔い確認とれず、その点すべて寺岡にまかせて引上げる場面。

◎高良ぬ按司の家来、源河大屋久と伴田大屋久が大石大主の動作を探りに訪れる。

◎大石大主のサビ刀見入り、仇討ちのないことをさぐる。

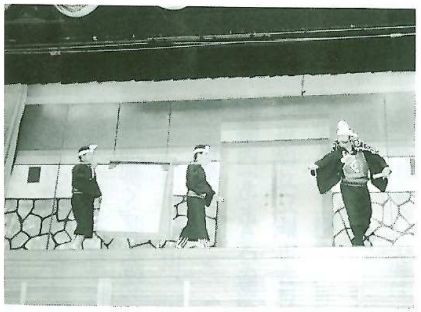
◎金松、塩冶の奥方よりの手紙を大主へ渡す。

◎源河大屋久と大石大主が酒飲み交わし仇討ちのないことを再確認するも金松の渡した手紙が源河は気にかかる。

## 第八幕　うみすぃなぬ宿（その二）

登場人物

**源河大屋久、伴田大屋久**



うみすぃなぬ宿より二人かごで帰ろうとする。

※源河大屋久がかごに乗り込んだ。伴田が話しかけても返事がないのでカゴのスダレを見廻していると、縁の下から源河の声で、「先程金松が大石に渡した手紙が気にかかるので、その様子を見届けてから帰ろうよ」と言い、伴田も納得する。

## 第九幕　うみすぃなぬ宿（その三）

登場人物

**大石、加那くずぃ、寺岡、矢間、喜如嘉、神崎、源河**

◎大石大主手紙を見入る。
（塩冶の奥方よりの手紙）

**柳　節**

柳　は　緑
大石が見下す文や下には源河が隠りてーよんな

**花　は　紅**

二階にはウムルが鏡に写して
その文見取ゆさーよんな

**人は只情　梅は匂**

ウムルがかんざしぱったい落
すぃば、あわてて、かくしゆさーよんな

◎大石大主手紙を急いで隠し、刀を抜いて縁の下に隠れている源河を刺す。

◎加那くずぃその手紙を見たことにより手紙の内容が知り渡らないために、大石の妻となるよう求め了解する。

◎加那くずぃ兄の寺岡と対面

**東　節**

歌　ああき　夢がやゆら
（兄妹再会思い入りの場面）

◎兄の寺岡は妹加那ぐずぃを大上段に斬りつけようとする。

**東　節**

後生ぬ永旅や戻らんてぃむぬ　慈悲なさやちやしゆが
義理ぬ責縄

◎寺岡が妹の加那くずぃを斬りつけようとするのを大石大主がこれをとめ、加那くずぃは母親に孝行せよ、又寺岡は仇討ちのためお供を許すと論せば、兄妹共に従う。

◎源河大屋久、寺岡に引き出される。

◎大石大主、連判状を広げて血判をうながす。



## 第十幕　討入り道行の場面

登場人物

**大石、寺岡、喜如嘉、神崎、矢間、金松、夜廻り（二人）**

**忠臣蔵口説**

一、浮世車ぬくりぐりと
　廻る時得て今は早
　宜野湾世ぬ按司高砂ぬ
二、家臣大石大主が
　君の仇ゆ討たんてい
　一味勇士四十余騎
三、裟婆ぬ暇ん今日限り
　谷の戸開きて鶯ぬ
　梅を見たるが嬉しやと
四、踊り跳りて飛び上る
　道に続いて出でたりば
　田港大屋久始めにて
五、大石里之子其の二人
　錦羽織の袖印
　いろはにほへと立ち出る
六、思う仇に当る時
　秋の木の葉散る如く
　散りてちりぬるらむうぃの
七、山を響かち行く程に　近く出でたる伊佐の守
　勝る鉞り振り乱し
八、出たるは矢間大屋久に　又は神崎与五郎は
　七尺の弓に矢をぬいて
九、着たる羽織の袖印　あさきゆめみしえひもせず
　遙か後より身をやつし
十、義平心は借受けて　天と川との合言葉
　忘るな兼ねての言い合せ
十一、出たるは喜如嘉大屋久が　五尺余りの薙刀を
　添い差し十字に差込んで
十二、槍を潜めて寺岡は　兼ねて用意の吊梯子
　さてむ心は天川ぬ
十三、思い切りたる其の虎ぬ　爪を開いて今日限り
　忠義の胸当打ち揃い
十四、忠義忠臣忠孝の　道は一筋真直に
　エイ連を乱さず忍び入り　実は忠臣手本なり

◎大石大主討ち入りの手配り言い渡し。

◎夜廻り二人、大石臣下に拍子木奪われる。

◎幕内で　大石の家来
（右出口は）天、天
（左出口は）川、川の声

◎幕内で　陣太鼓、鉄砲鳴りひびく。

◎幕内で　高良を討ちとる。
縛りつけて生け捕りにする。

# 第十一幕　勝ちどき

登場人物

大石、寺岡、神崎、喜如嘉、金松、矢間、
平田之子（白い着物をつけている）
高良按司

かんちやい節

歌　敵討ち取たる今日ぬ
誇らしゃや
過し按司添し嬉しや
召せら